

# 背番号 10

ジリジリと太陽が照りつけるグラウンドは白く乾ききっている。ノックのボールが右へ左へと容赦なく飛んでくるたびに砂煙があがる。飛びついて捕球したボールを握ろうとしたが、汗で手が滑った。一瞬本塁への送球が遅れた。監督の厳しい声がとんでくる。

「しっかり掴まんかあ。」

僕は、甲子園に出たくてこのS高校を選んだ。両親は、家から近い高校を強く勧めたが、それを押し切って入学した。

それから一年余りが経ち、夏の県大会で惜敗した先輩が引退した後、僕はキャプテンとして新チームを引っ張る立場になった。チームの目標は「甲子園出場」。これは決して夢ではない。過去には何度か甲子園に出場しているS高校であり、地元は野球好きの人が多く土地柄として有名で、期待も大きい。

「よし もう一本。」

大声で監督に答えた僕の目の前に、強烈なスピードでノックのボールが迫る。その瞬間に目の中に汗がしみこんだ。ボールがぼやけて大きくなったが、必死に地面を蹴ってボールを体ごと受け止める。投げたボールがキャッチャーミットにバシッとおさまった。

「ようし、終わり。」

大きな声に、ほっとしたのもつかの間。関係プレー、走塁練習、打撃練習と息をつく間もなく練習は続く。用意したお茶はすぐになくなり、顔や腕は塩を吹く。

こうして、夏の苦しい練習をこなしきり、新チームの力を試す秋の新人戦を迎えた。僕は、チームはかなりの力をつけたと思っていた。しかし、一回戦、二回戦と勝ち抜いた後、準々決勝に臨んだが、強豪のY高校に逆転負けしてしまった。この敗退は春の甲子園出場が絶望的であるということの意味する。

翌日の練習は、暗いムードが漂っていた。

「あんなに苦しい練習をやり抜いてきたのに……。」

「やっぱり俺らには、甲子園は無理ってことだ。」

と言い出す者も出てきた。

走塁練習や守備練習の動きは、新人戦前と明らかに違っていった。それでも監督は三日間黙ってその様子を見ていたが、四日目の練習の後のことだった。監督は全員を集め、みんなを見回してただ一言、

「お前たち、それでいいのか。」

と言った。みんなは黙って下を向いた。僕はキャプテンとして身が縮まるような思いがした。

僕は、それからは、後始末やグラウンド整備の不備に対して、あるいは動きの緩慢さや小さなミスに、だれかれなく大声を出してとがめた。しかし、一向にみんなの気持ちは高まらず、僕の気持ちは我慢の限界に達していた。

「こんなんじゃ甲子園なんかとても無理。キャプテンなんかやってられんわ。」

思わず父の前で不満を口にした。父は黙って聞いていた。

それでも、冬場の練習を何とか続けていた。

「集合が遅いじゃないか。」

「もっと真剣にやれよ。」

自分のイライラをぶつけるかのように注意する僕を、次第に同級生や下級生は冷ややかな目で見るようになった。時には避けるような行動をとる者さえもある。どうすればいいのか分からなくなっていく自分がいた。

そんな二月の寒い日。遠投練習をしていたその時、

「あっ。」

突然、右肘に鋭い痛みが走った。腕がダランとなって力が入らない。思わず肘を押さえてうずくまった。

曲げようとするともた痛みが襲ってくる。監督は僕の様子を一目見て、

「すぐに病院へ行こう。」

と促した。

医者言葉は無残だった。

「右肘が剥離骨折している。完全に治るまでには半年くらいはかかる。それまでボールを投げてはいかんぞ。」

僕は目の前が真っ暗になった。

「そんな……。」

思わず口走る僕を、医者はじろっと見た。確かに肘を曲げることもできないのだから、ボールを投げるところではない。これでは顔も洗えない。

電車に乗ったこともはっきりとは覚えていない。気が付いたら駅に着いていた。家への道をたどりながら

さまざまなことが脳裏に断片的に浮かんで消えた。

固定された僕の腕を見て、父は驚いたようだが、僕の説明を黙って聞いた。

「父さん、僕、野球をやめて勉強に専念しようか。」

ボソッと、つぶやいたとたん、

「お前の野球に対する思いは、そんなもんだったのか。」

と、一喝された。思わず父の顔を見ると、顔が真っ赤になっていた。こんな父を見たことがなかった。父は高校進学の時、野球より勉強をと近くの学校を勧めたはずなのに、どうしてだろうか。その晩、いろいろなことを考えていると布団に入ってもなかなか寝付けなかった。

次の日、僕は授業が終わるのを待ちかねて急いで部室に行った。いつものように着替えてグラウンドに出て、グラウンド整備、バットやボールの準備など、自分のできることをした。

これまであんなに避けていた

部員が心配そうに見ているのが目に入った。

毎日練習に出てもバットを振ることもボールを投げることもできない。ひたすら、チームメートたちに言葉を掛け続けた。側で見ていると、グラウンドでプレーしている時には見えないうことがよく見える。ポケットに入れたメモ帳にさっと書きとめ、時間を見つけては、彼らに伝えた。よいプレーの時は、

「ナイスバッティング。」

「いいぞ。」

と、大きな声で励ました。そのうち、

「キャプテン、ちょっと聞いて欲しいことがあります。」

「居残り練習に付き合ってくれよ。」

と、僕に言うようになってきた。

北国の遅い春が訪れた頃には、チームにすっかり明るさと元気が戻ってきて、どんどん結束も固くなった。練習の最後に、僕が声を掛けて、

「甲子園、行くぞ。」

と円陣を組むのが習慣になってきた。

夏の甲子園大会の県予選が近づいてきたある日、練習が少し早めに切り上げられ、集合の合図があった。

「ベンチ入りのメンバーを発表する。」

監督の言葉に、みんな緊張の面持ちだ。

「橘。」

真っ先に名前を呼ばれた僕は、えっと耳を疑った。故障者の僕が選ばれるはずはない。

一番前に座っている僕を監督はまっすぐに見ている。

「背番号 10 だ。お前はキャプテンとしてずっとよくチームを見てくれた。大会でも頼むぞ。」その時チームメートから拍手が起こった。拍手に促されて立ち上がり、監督の差し出すゼッケンを両手で受け取った僕は、監督に一礼した。すると、もう一度さらに大きな拍手が起こった。総勢八十人の拍手がぐっと胸に迫ってくる。僕は深々と頭を下げた。

この年、S 高校は、十一年ぶりに県の頂点に立ち、甲子園出場を決めた。背番号 10 はベンチにいるキャプテンだった。